

# 香芝——古代史の謎を探る①

## みんなで考えよう、郷土の歴史を

塚口 義信

古代の香芝市は、ヤマト政権（のちのヤマト朝廷）とともに歩んできた、といっても過言ではありません。それは香芝市が、ヤマト政権の勢力基盤となった地域であったこととともに、大和と河内を結ぶ幹線路の一つとして知られる大坂道の要衝に位置するという、めぐまれた地理的条件にあったことによります。したがって、古代の文献史料には、しばしば香芝市のことが出てきますし、また、それに呼応するかのごとく、香芝市域には数多くの遺跡が存在しています。そして、いつも目のあたりにしている遺跡や神社、仏閣、地名など、これらはもはや、私たちにとっては精神生活の一部になっているとさえいえそうです。

しかしながら、香芝市の古代史は、今もって謎に満ちあふれています。私たちの郷土の歴史がよくわからない、とは、なんと、もどかしいことではないでしょうか。

いまから私は、できるだけ多くの史料を提示しながら、香芝市の古代史について述べていきますので、ぜひ皆様方も、ご一緒に考えてみてください。アガサ・クリスティやエラリー・クイーンの推理小説のように手際よくいかないけれども、少しはその実相に迫ることができるとは思いませんか。

香芝市には、鎌田遺跡や平野塚穴山古墳、片岡尼寺、大津皇子と二上山、威奈大村骨蔵器、大坂越えの道のことなど、実に多くの考えてみなければならぬテーマがあります。今回は、葛城氏と顕宗・武烈両天皇の問題を中心にみていきたいと思います。

# 謎の巨大豪族・葛城氏

## ◆対立する二つの学説

各地で巨大古墳が築造されていた「倭の五王」の時代(五世紀代)に、日本で最も強大な勢力を誇っていたのが、葛城氏(氏の成立は五世紀後半以降と考えられています)の前身の一族「とでもいうべきでしょうが、ここでは仮に、このようにいっておきます)です。

『古事記』『日本書紀』(以下、「記」「紀」と略します)によると、葛城氏の大族長であった葛城襲津彦は、四世紀後半に日本の朝鮮進出に際して活躍した武将の一人であり、また、その娘の磐之媛は仁徳天皇の皇后となって、のちの履中・反正・允恭の三天皇を生んだといわれています。さらに、履中天皇は襲津彦の孫にあたる黒媛を娶って市辺押羽皇子をもうけますが、その子の衰祢・意祢二王は清寧天皇亡きあと相次いで即位し、顕宗・仁賢の両天皇になったと伝えられています。このように葛城氏は、対朝鮮問題で活躍する一方、五世紀代の天皇家の外戚として、大いにその権勢をふるっていたとされているのです。

ところが、現在、この葛城氏の勢力圏の問題をめぐって、学界では二つの説が対立しています。一つは、御所市を中心とした地域を想定する説で、他の一つは、北葛城郡王寺町から御所市に至る地域を想定する説です。前者の説に従えば、香芝市は葛城氏とはあまり関係がなく、したがって、馬見丘陵(豆山)付近一帯に

築かれているいわゆる馬見古墳群の被葬者たちも、葛城氏以外の集団を想定しなければならぬこととなります。いったい、いずれの説が当を得ているのでしょうか。

## ◆謎を解く力

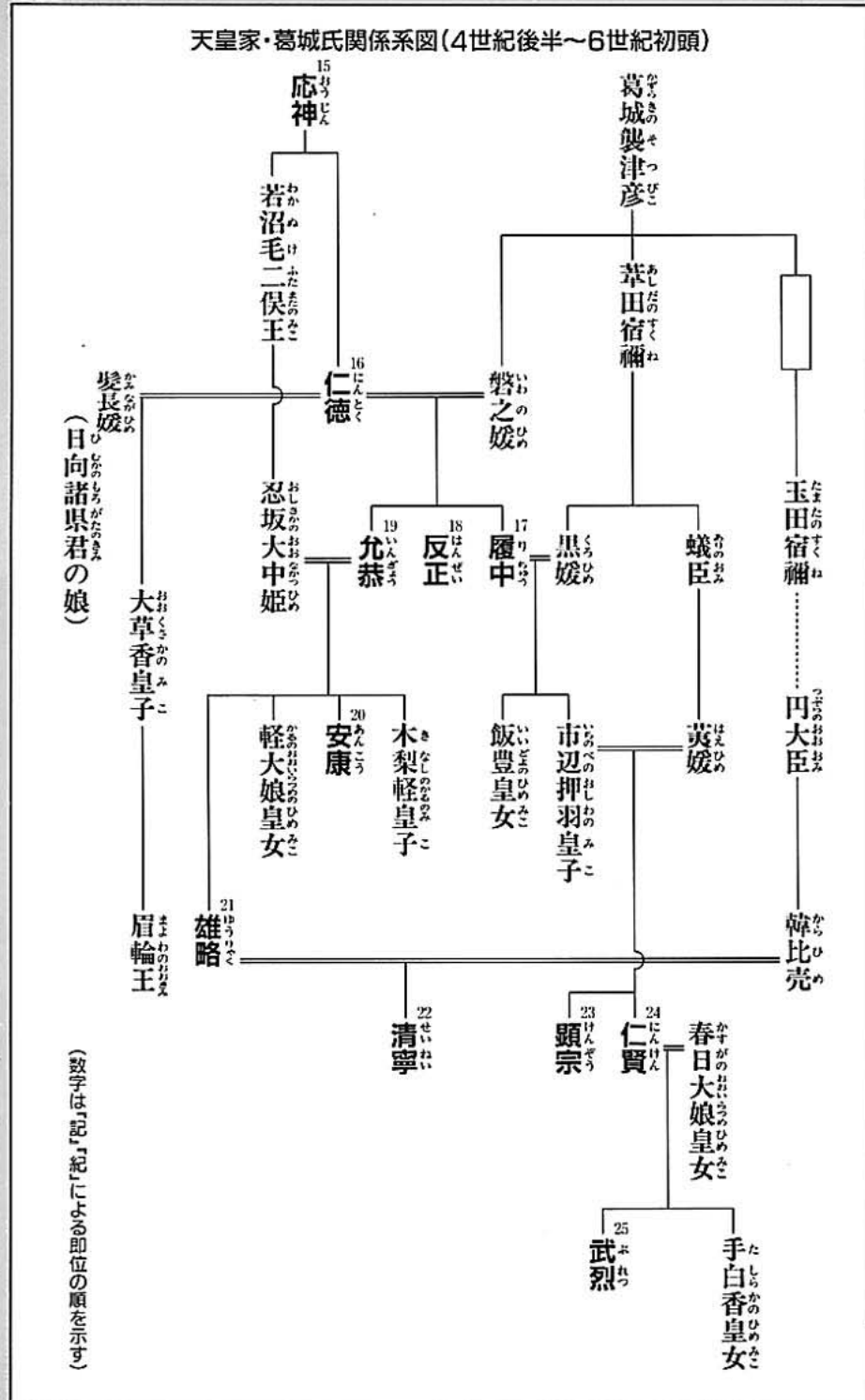
私が、かねてから主張しているのは、後者の説です。「記」「紀」を初めとする文献史料をひもとくと、葛城氏は葛城南部の地域だけではなく、北部の地域とも深

い関係をもっているからです。系図1をご覧ください。実は、一口に葛城氏といっても、そこには二つの系統のあったことがわかります。一つは、「襲津彦」——玉田宿禰(襲津彦の子とする所伝もあります)——「円大臣」の系統であり、他の一つは、「襲津彦——葦田宿禰——蟻臣——黄媛」の系統です。従来の研究では、後者の系統の葛城氏がほとんど取り上げられなかったために、葛城氏は御所市付近を勢力圏とする豪族で、允恭天皇

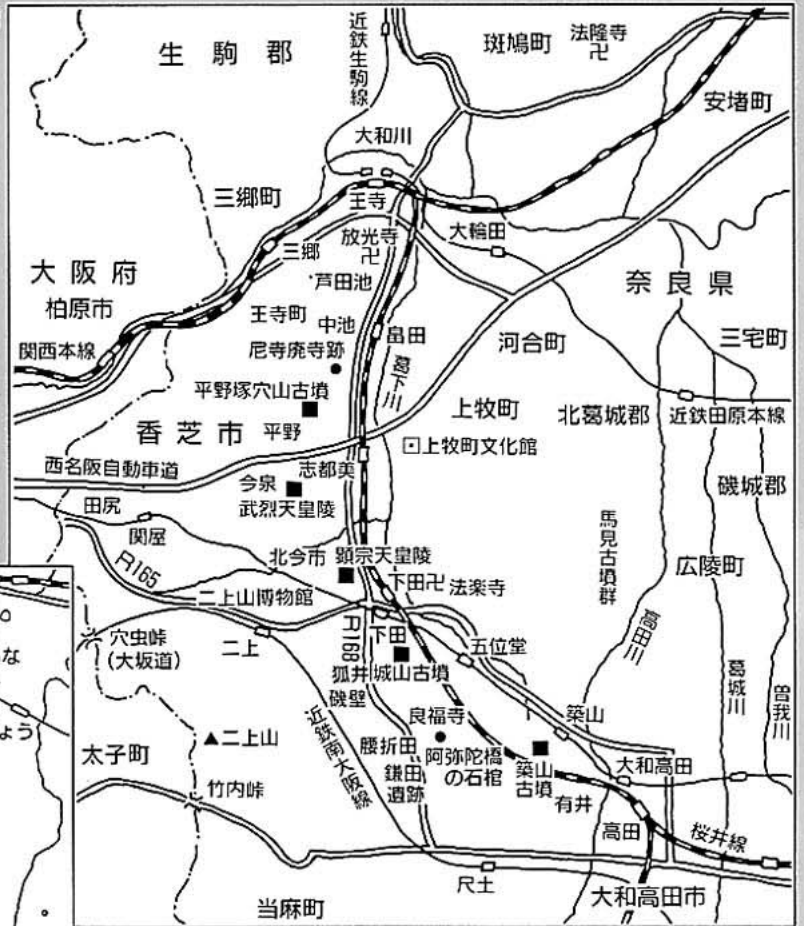
の死から雄略天皇の即位に至る内乱の過程で没落していった、というような結論に落ち着かざるをえなかったものと思われまます。

だが、葛城氏には、二つの系統があったのです。この視点から関係史料を分析しなおしてみると、どのようなことなるでしょうか。はじめに述べた疑問を解くカギは、この点にありそうです。そこで、まず、前者の系統の葛城氏からみていくことにしましょう。

系図-1 天皇家・葛城氏関係系図(4世紀後半～6世紀初頭)

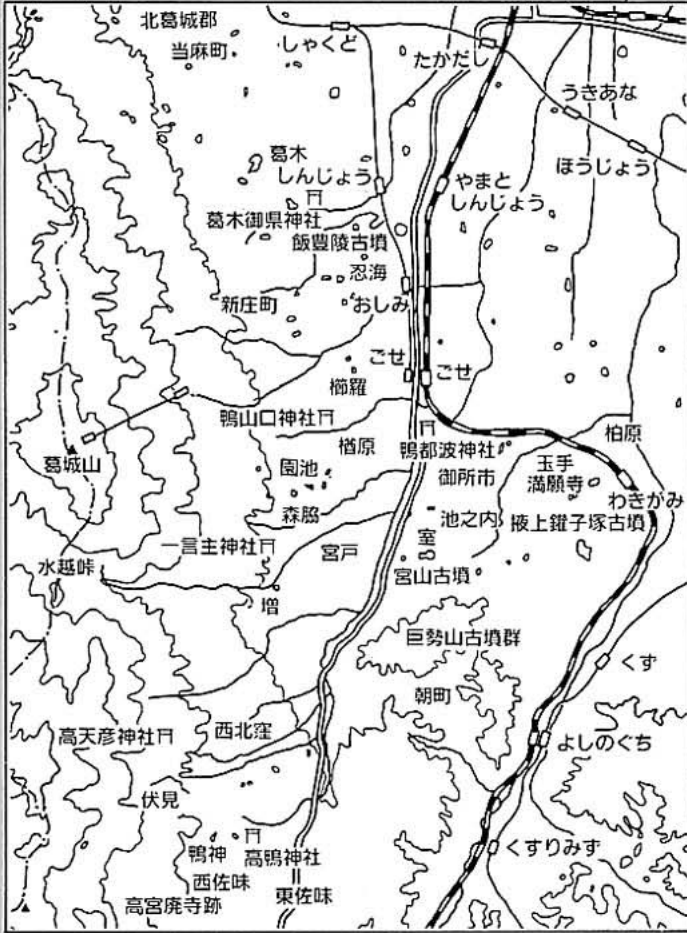


地図-1



葛城氏関係地図 (香芝市周辺)

地図-2



葛城氏関係地図 (御所市周辺)

0 1 2 3 4 5km

◆玉田宿禰系の葛城氏

玉田宿禰系の葛城氏の実態を明らかにするうえで、「紀」推古天皇三十二年(六二四)十月の条の記事は、見逃すことのできない史料です。

それによると、当時、大臣というヤマト朝廷の最高執政官の地位にあった蘇我馬子は、推古女帝のもとに二人の使者を遣わし、皇室の直轄領である葛城県の永久的領有を願ひ出たといひます。これに對して、推古女帝は断固として応じなかつたのですが、不思議なことに、「葛城県は元臣が本居なり。故、其の県に因りて姓名を為せり」(葛城県は、もともと自分の本拠地です。それゆゑ、県の名称にちなんで(蘇我葛城臣という)姓名を名のつています)という馬子の言葉に對しては、一言も反駁していません。なぜでしょうか。

馬子の言葉が葛城県領有の根拠となつたのは、蘇我氏と葛城氏が建内宿禰系譜を通じて、同族關係にあつたからでしょう。すなわち、馬子は蘇我氏が葛城氏と同族であるというゆゑをもつて、葛城氏のウジ名を称し、「聖徳太子伝曆」に蘇我葛木臣とみえます。そしてその本拠地であつた葛城県の地をあたかも自分の「本居」であるかのようにいい、それを根拠にして、葛城県の領有権を主張したものであると思われまふ。このように理解して誤りがなければ、葛城県の地はもともと葛城氏の本拠地であつた、ということになります。

では、推古天皇三十二年より以前に、葛城氏の所領が天皇家のものになつたと

このような事実があるのでしようか。実は、これに該当する記事が「記」「紀」にみられるのです。時代は五世紀半ばすぎのことです。

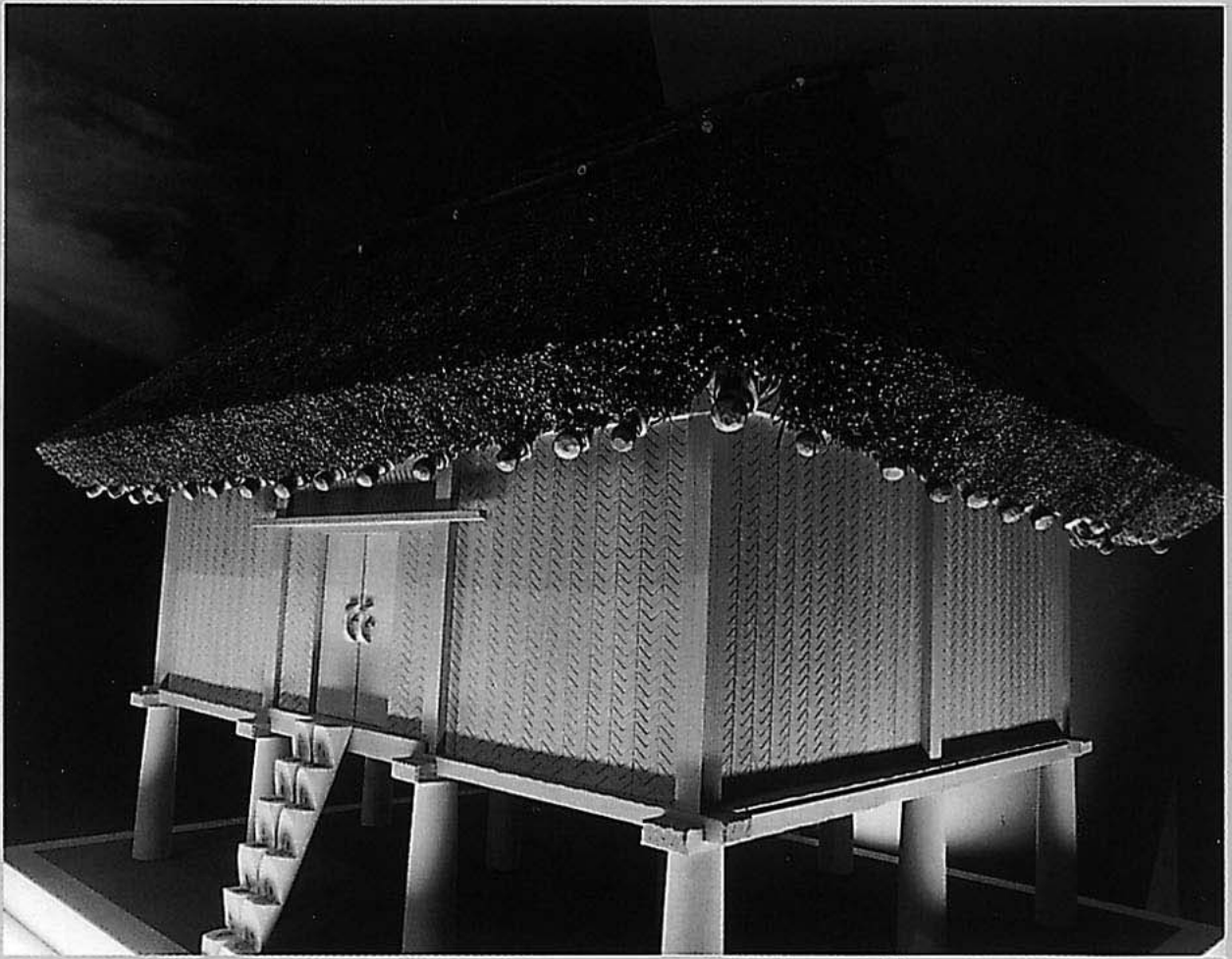
允恭天皇の逝去後、木梨輕皇子が皇位を継ぐはずでしたが、同母妹の輕大娘皇女と道ならぬ恋におちいたため、伊子(愛媛県)に流されてしまいました。その結果、弟の穴穗皇子が即位して安康天皇となりますが、即位後まもなく、臣下の讒言を信じて殺してしまつた大草香皇子の子、眉輪王によって暗殺されてしまいました。そこで、安康の弟の大泊瀬皇子(のちの雄略天皇)は兄のあだをとるため、眉輪王や彼に荷担した葛城円大臣ら討ちますが、そのとき、円大臣は雄略に對して、娘の韓媛と「葛城宅七区」(「記」では「五処の宅七区」)を奉獻したといひます。葛城氏の所領が天皇家のものになつたという記事はこれ以外には見当たりませんので、このとき雄略に献上されたという「葛城宅七区」こそ、のちの葛城県の起源をなすものと考えられます。では、これはどこにあつたのでしようか。

葛城氏の本拠地とされている「葛城高宮」(葛上郡高宮郷、御所市西佐味付近)の地が含まれていたことはいふまでもありませんが、北葛城郡新庄町付近(葛下郡の一部と忍海郡)の地もまた、そのなかに含まれていたと考えて誤りありません。なせなら、そこには葛城県の守護神ともいふべき葛木御巢神社が鎮座しているからです。そうだとすると、つぎに述べるように、さらに桑原(葛上郡桑原郷、御所市池之内が朝町付近)や佐藤(葛上郡

ともに地名に由来しているものと考えられます。前者は御所市玉手に所在する瀨願寺のすぐ南方に小字・南浦があり、それを一つに「玉田」(タマタ)の転訛と考えられます(とも称していたといひますが、おそらくこの地名に基づいているとみてよいでしょう。一方、後者については、御所市柏原に「ツブラ」の地名があり、これに由来するものと考えられます。付近には、葛城地方最大の前方後円墳として著名な室宮山古墳(室の大墓古墳・墳丘長二四六メートル)や、掖上鎌子塚古墳(同一五〇メートル・前方後円墳)などがあつて、葛城氏本流の首長が居住していたとみるにふさわしい土地がらです。また、玉手を本拠とする豪族に玉手臣氏がいひますが、「記」によると、その始祖は葛城長江曾都毘古(製津彦)であると伝えられています。

以上のことから推察して、製津彦の所領は玉田宿禰を通じて円大臣に伝えられた蓋然性が高いといつてよいでしょう。これを要するに、のちに葛城県となつた皇室の直轄領は、もとを正せば玉田宿禰を媒介として円大臣に伝えられた製津彦の所領にほかならず、しかもそれは、忍海・高宮・桑原・佐藤の四邑を含む、かなり広大な地域であつたことが推察されるのです。

さて、ここで、玉田宿禰系の葛城氏がどのような地域と深いかわりをもっていたか、もう一度点検してみてください。お気づきのとおり、雄略天皇に滅ぼされたこの系統の葛城氏は、葛城南部の地域すなわち古代の葛上郡・忍海郡と非常に



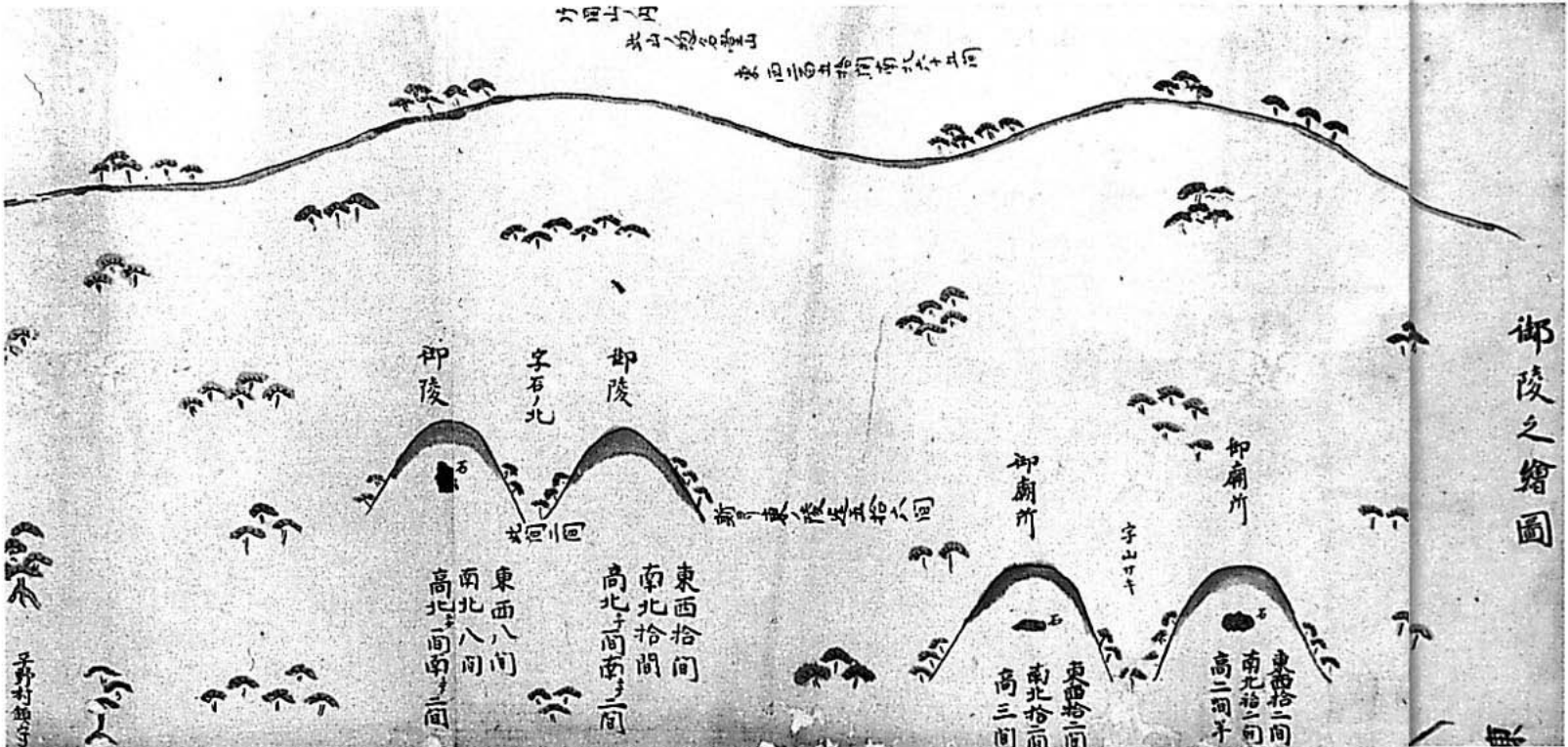
鎌田遺跡から出土した部材をもとに復元した豪族居館(二上山博物館所蔵)。主は葛城一族か?

佐味、御所市西佐味・東佐味付近)の地もまた、そのなかに組み込まれていた可能性が強いと考えられます。

「紀」神功皇后摂政五年の条によると、新羅(朝鮮半島にあつた国の一つ)の草薙城を攻撃した葛城製津彦は、そこから多くの人民を俘人(捕虜)として連れ帰つたが、このときの俘人が、桑原・佐藤・高宮・忍海など四つの邑(村)に住んでいる漢人たちの始祖である、と伝えられています。ここで注目されるのは、これら四邑の地名がすべて葛城氏の勢力圏の中心部に集中していることです。おそらくこのとき連れてこられた俘人たちは、葛城氏の領民となつたので、その勢力の中心地に住むことになつたのでしよう。

製津彦と円大臣との関係は明らかではありませんが、円大臣が雄略に奉獻した所領のなかに忍海と高宮が含まれていたことは上述のとおりですから、円大臣は製津彦の所領を継承した、五世紀代における葛城氏の族長的地位にあつた人物と推測されます。そうだとすると、円大臣は忍海・高宮のみならず、そのとき同時に桑原や佐藤の地もまた継承したはずで、このようにみえてくると、円大臣が雄略に奉獻した所領(「葛城宅七区」)のなかには、桑原と佐藤の地も含まれていた可能性が強い、といつてよいでしょう。

円大臣の出自は、「公卿補任」によると、製津彦の孫で、玉田宿禰の子と伝えられています。真偽のほどはよくわかりませんが、葛城氏の本流に位置していた人物であつたことは間違いないでしょう。ところで、玉田宿禰と円大臣の名は、



「片岡山」の文字が見える平野集落の古絵図

深いかかわりをもつていたので、おそらく玉田宿禰系の葛城氏は、葛城南部の地域とはほとんど関係をもつておりません。逆に、北部地域と深い関係をもつていることが一つの特徴です。

◆玉田宿禰系の葛城氏

ところが、それに対して、もう一方の葛城氏、すなわち葦田宿禰系の葛城氏は、葛城南部の地域とはほとんど関係をもつておりません。逆に、北部地域と深い関係をもつていることが一つの特徴です。葦田宿禰という名前からして、すでに北部地域と深い関係にあつたことを示しているのです。北葛城郡上牧町には、現在もおお文化館が建っている付近に「葦田(葦田池・葦田原)」という地名が残っています。また、王寺町にも「芦田池」があり、しかも、この池の名は、正安四年(一三〇二)に成立した「放光寺古今縁起」にすでに出てきます。したがって、アシダは王寺町から上牧町西部に至る付近一帯の地域の総称で、葦田宿禰の名は、おそらくこの地名に基づいていると考えてよいでしょう。

同様に、蟻臣の名も葛城北部の地名に由来するとみて、ほぼ間違いありません。現在、大和高田市に有井というところがあります。有井の地名は「有井」であり、アリノ臣の名はこの地名に由来するものと思われまふ。有井の本来的地名が有であったことは、集落内に有田や有脇といった小字名が存在することから明らかです。井は井戸の意味で、よい湧水の出る井戸があつたのでしよう。現在も、有井の集落には磐園小学校の近くに「弘



北今市にある「顕宗天皇陵」

今泉にある「武烈天皇陵」

法井戸」と称する古い井戸があつて、名所の一つになっています。

また、この系統の葛城氏から出たとき、記されている天皇に顕宗天皇と武烈天皇がいますが、「記」「紀」によると、この二人はともに「傍丘磐杯丘陵」(「紀」による)に葬られたと伝えられています。傍丘の磐杯とは、どこなのでしょう。残念ながら、確かなることはわかりません。しかし、ここで重要なのは、「傍丘」という地名です。傍丘(片岡)というのは、葛城北部のすなわち現在の地名でいいますと、王寺町から河合町西部、上牧町、香芝市、大和高田市にかけての地域の総称なのです。

いくつか例を挙げてみましょう。王寺町には小字・傍岳山に片岡坐神社(片岡神社・式内社)が鎮座しております。片岡王寺(片岡僧寺、現・放光寺)という名の寺もありました。それから、私たちの住んでいる香芝市には、かつて片岡尼寺(片岡寺)という寺がありましたし、片岡山法楽寺や片岡山と呼ばれている山もあります。また、大和高田市には、片岡という小字名が残っています。河合町あたりにも大字名として、たとえば片岡の薬井というような地名が残っています。しかも、中世には、北葛城に片岡荘という興福寺の荘園もおかれていました。

以上、いくつか例を挙げましたように、葦田宿禰系の葛城氏は、古代の葛下郡と広瀬郡の一部、すなわち、境域は必ずしも同じではありませんが、新庄町と当麻町を除いた、ほぼ現在の北葛城郡と香芝市および大和高田市に相当する地域と非常に密接な関係をもっていた、というこ

とになるのではないかと思います。

#### ◆香芝市と葛城氏

このようにみてくると、香芝市が五世紀代に葦田宿禰系の葛城氏と深いかわりをもっていたことは、ほぼ確実だといつてよいでしょう。葛城地方が葛上と葛下の二郡に分かれていたのも、実は五世紀代における葛城氏のあり方が、後世にまで影響を及ぼした結果なのです。なお、両郡の間に忍海郡が建郡されたのは、この地域が葛城県の中心地であったという事情に基づくとところが大きいと思われる

#### 顕宗・武烈両天皇の陵墓を追って

##### ◆むつかしい陵墓比定

現在、顕宗陵は香芝市北今市に所在する古墳に、また武烈陵は同今泉にある古墳らしきものに、それぞれ治定されています。これらの治定はともに明治二十二年(一八八九)に行われたものですが、疑問な点が多く、簡単には従えないのが実状です。

まず前者の場合、天皇陵に比定するときの前提条件ともいえる、古墳の築造年代や規模すら明らかになっていないのに、顕宗陵に治定されているのです。顕宗天皇は五世紀末葉前後の天皇ですから、治定が正しいとすると、この古墳の築造年代もまた、それとほぼ同時期でなければなりません。ところが、この古墳については、テーターがほとんどなく、現在の



武烈陵かも知れない香芝市最大の前方後円墳の狐井城山古墳

ところ、不明というほかないのです。前方後円墳が円墳が、その墳形すら確認されていない、というのが実状なのです。

つぎに、規模の点については、これもまた、よくわかりません。ただし、図面によると、東西九〇メートル、南北七〇メートルほどの丘陵尾根上の先端部に築かれていますから、さほど大きなものではないかと思われます。そうだとすると、この古墳を天皇陵に比定する考え方には、否定的ならざるをえません。なぜなら、五世紀末葉の天皇陵にしては、あまりにも小さすぎるからです。

後者にいたっては、さらに論拠に乏しく、単なる想像の域を出ていないといつてよいでしょう。そもそも、この古墳らしきものが、古墳であるという確証もないのです。というより、現在のところ、自然丘陵ではないかとする見方が、考古学界では半ば通説になっているようです。

顕宗・武烈陵をどの古墳に比定すべきかという問題は、かなり古くから議論の対象となっており、江戸時代には、平野の正楽寺本堂の西側にある平野塚穴山古墳（一辺約二二メートル・方墳）が顕宗陵に、平野三・四号墳（消滅）が武烈陵に比定されていたこともありましたが（山陵絵図）。また、大和高田市の築山古墳（墳丘長二二〇メートル・前方後円墳）を武烈陵に、そしてその南に築かれている狐井塚古墳（同七五メートル・前方後円墳）を顕宗陵に、それぞれ比定する考え方も提起されてきました。

この場合、先学の多くが比定の根拠と

された文献史料は、九二七年に成立した「延喜式」に記されている陵墓の記載です。それによると、「傍丘磐杯丘南陵」（顕宗）、「傍丘磐杯丘北陵」（武烈）とあり、

顕宗の陵墓は、武烈のその南に所在したとされるされています。したがって、ほとんどの研究者はこの南・北の位置関係を前提として、それぞれ独自の比定論を試みてこられました。

だが、こうした研究には、前提そのものに致命的な欠陥があったのです。それは、「延喜式」の記載が、実は「延喜式」編纂当時に於ける一つの見解にすぎない、ということに気づかれなかったことでした。したがって、「延喜式」の記載を根拠に陵墓比定を試みても、砂上の楼閣とならざるをえないのです。もちろん、「延喜式」の記載のすべてがあやしいというわけではありませんが、少なくとも武烈以前の陵墓の記載については、そのように考えねばならないと思います。

では、私たちは、何を根拠に陵墓比定を試みればよいのでしょうか。それは、顕宗・武烈の陵墓に限って言えば、「記」の記載です。六世紀中葉（欽明朝）に成立した「帝紀」に基づいて書かれた「記」の陵墓記載こそ、典拠とすべき根本史料なのです。

さて、その「記」によると、顕宗の陵墓については、「片岡之石环崗上」（記）、「傍丘磐杯丘南陵」（記）、また武烈については、「片岡之石环崗」（記）、「傍丘磐杯丘陵」（記）と記されています。ここには「南」「北」の文字がみえません。顕宗・武烈の陵墓に関する最も古い伝承で

は、両天皇の陵墓は片岡の磐杯丘に所在するとあるだけで、両者の位置関係については何らふれるところがないのです。

#### ◆武烈陵は狐井城山古墳か

では、私たちは、どのような方法で顕宗・武烈陵を探し出せばよいのでしょうか。現在のところ、方法は二つあると思います。

一つは、片岡の地域で、時期と規模の点において、顕宗および武烈陵とする最もふさわしい古墳を探し出すことです。考古学界では、当代で最も大きい古墳を大王墓（天皇陵）と考えるべきだとする意見が大勢を占めていますから、五世紀末葉および六世紀初頭前後の時期で最も巨大な古墳を両天皇の陵墓に比定するの、自然な考え方だといえます。

二つめは、古墳の近くに、土師氏ないし土師集団の存在が確認できるかどうかです。土師氏は天皇陵の造営に関与してきた氏族で、四世紀後半以降は、天皇陵の存在が伝えられている地域には、必ずといってよいほど、土師氏の居住していた痕跡がみとめられます。

たとえば、百舌鳥古墳群には仁徳・履中・反正の陵墓が営まれたと「記」「紀」に伝えられています。この地域には実際に、天皇陵とするにふさわしい大山古墳（仁徳陵古墳）や百舌鳥ミサンザイ古墳（履中陵古墳）、土師ニサンザイ古墳などの前方後円墳が存在するとともに、その近隣の土師郷（堺市土師町・新家町）に土師氏が居住していました。古市古墳群や佐紀盾列古墳群、今城塚古墳（継体天皇陵）な

どの場合にあっても同様です。以上の視点から、武烈陵とするに最もふさわしい古墳を探してみましよう。

片岡の地域で、六世紀初頭に築かれたと考えられる最も大きな古墳は、香芝市狐井にある狐井城山古墳です。この古墳は、墳丘長約一四〇メートル、後円部の径約九〇メートル、前方部の幅約一一〇メートルの規模をもつ前方後円墳で、まわりには満々と水をたたえた濠がめぐっています。この古墳は香芝市最大の古墳ですから、ご存知の方も多いいのではないかと思います。実は全国的にみても、六世紀初頭という時期においては、屈指の大古墳なのです。まさしく天皇陵とするにふさわしい古墳です。しかも、この古墳は丘の上に築かれており、「石环崗」「磐杯丘陵」と呼ばれている名称とも一致します。

所在地、築造年代、規模などの点からみて、武烈陵はこの狐井城山古墳である可能性が強いといつてよいのではないのでしょうか。

のみならず、この古墳の近くに、土師氏が居住していた痕跡もあるのです。「紀」垂仁天皇七年七月の条に、つぎのような興味深い話が記されています。

側近の人が垂仁天皇に、つぎのように申し上げた。「当麻邑（当麻町）に当麻蹶速という、勇敢な人がいます。いつも人びとに語って、「四方をさがしても、たぶん私の力に並ぶ者はいないだろう。なんとかして強力な人に出会い、生死を問わず、力くらべをしたいものだ」といっています。」



野見宿禰が相撲を取ったという伝説のある腰折田から二上山を望む



阿弥陀橋の石棺(良福寺)・被葬者はだれか？

天皇はこれをお聞きになり、「私は、当麻蹶速が、天下の力持ちだと聞いた。これに匹敵する人はいないだろうか」と仰せられた。すると、ひとの臣が進み出て、「私は出雲国に、野見宿禰という勇士がいると聞いています。試みにこの人を召して、蹶速と取り組ませてみたらよいと思います。」と申し上げた。

そこで、使者を遣わして、宿禰を召し出し、二人に相撲をとらせた。二人はあい対して立ち、それぞれ足を挙げて蹴とばした。まもなくして、宿禰は蹶速のあばら骨を折り、また彼の腰を踏みくじいて、殺してしま

った。そこで、蹶速の土地を奪い、それをすべて宿禰に賜わった。これが、この邑に「腰折田」という所のあるゆえんである。宿禰はそのまま留まって、朝廷にお仕えした。

野見宿禰は土師氏の祖先です。その宿禰が腰折田付近の地を賜わり、そのまま留まって朝廷にお仕えした、というのですから、おそらく土師氏は古代のある時期に、当麻町付近に居住していたのでしよう。というより、腰折田付近に居住していたことのある土師氏が、そのいきさつを説明するために、この話を語っていた、といった方がよいかも知れません。

では、この腰折田とは、どこなのでしょう。実は、香芝市磯壁(旧・良福寺村)に、腰折田の遺称地と伝える所があるのです(『大和志』)。この地は当麻町と接していますので、右の説話の内容とも合致します。断定はできませんが、旧・良福寺

の腰折田がその遺称地である可能性は大いにあります。

そうだとすると、ここに、興味深い事実が浮かび上がってきます。それは、この腰折田の北東六〇〇メートル弱ほどの所に、狐井城山古墳があることです。六〇〇メートルといえは、指呼の距離です。これはけっして偶然とは思えません。おそらくこの地に居住していた土師氏は、狐井城山古墳の造営に関与していたのではないのでしょうか。

このようにみえてくると、前述したように、土師氏は天皇陵の造営に携わっていた氏族ですから、狐井城山古墳は天皇陵である可能性が強いといつてよいでしょう。そうすると、その被葬者は古墳の築造年代からいって、武烈天皇以外には考えがたいということになります。

つぎに、顕宗陵についてはどうでしょう。残念ながら、片岡に所在する古墳の全容が明らかになっていない現状では、不明とせざるをえません。この問題については、今後の課題とさせていただきます。と思います。

#### 執筆者の紹介

昭和二十一年(一九四六)大阪府生まれ。現在、香芝市藤山に在住。堺女子短期大学(日本史学科)教授。文学博士。関西大学講師。帝塚山学院短期大学講師。大阪歴史学会事務局長。香芝市文化財保護審議会委員。(財)八尾市文化財調査研究会評議員。広陵町文化財保護審議会委員。

#### 主な著書

「神功皇后伝説の研究」(創元社、一九八〇年)、「ヤマト王権の謎をとく」(学生社、一九九三年)、「日本国家の起源を探る」(新人物往來社、一九九四年、共著)、ほか多数。専門領域は、日本古代史・文化人類学・民俗学。